



〈データベース使用例〉

- ① 「dream」フォルダを開きます。
- ② 「top」をダブルクリックします。
- ③ 右に示す「目次」が表示されます。
- ④ [はじめに](#) をダブルクリックすると、本データベースの概要を見ることができます。
- ⑤ [日記 1\(1888-1913\)へ](#) をダブルクリックすると、1888～1913年までの熊楠の夢に関するデータベースが表示されます。
- ⑥ [日記 2\(1914-1941\)へ](#) をダブルクリックすると、1914～1941年までの熊楠の夢に関するデータベースが表示されます。
- ⑦ [論考へ](#) をダブルクリックすると、熊楠の論考における、夢に関するデータベースが表示されます。
- ⑧ [書簡へ](#) をダブルクリックすると、熊楠の書簡における、夢に関するデータベースが表示されます。

目次

- [はじめに](#)
- [日記 1\(1888-1913\)へ](#)
- [日記 2\(1914-1941\)へ](#)
- [論考へ](#)
- [書簡へ](#)

※このデータベースは決して「完成版」ではない。特に1914年以降の「日記2」は、現在(2012年1月)も、東京と関西にある「南方熊楠翻字の会」で鋭意翻刻中である。この会は原則として月に1回のペースで行われている(筆者は東京・翻字の会〔立教大学〕に参加している)。熊楠の字は読みづらいことこの上なく、毎回7～8名で分担し翻刻を行っているが、1年間(11回〔8月は休み〕)の会で、やっと「日記」の1年分を翻刻し終えることができるかどうかという状況である。本データベースにおける「日記2」は、「岡本清造翻刻版」と「南方熊楠翻字の会」で翻刻したものを参照にした。筆者は、さらにこれらと顕彰館にある現物日記を比較しつつ、夢に関する記述を抽出し翻刻した。しかし、データベースに載せた「日記2」における本文(日付からリンクを貼った箇所)は、抽出した中でも特に重要と思われる箇所、つまり本論文の内容に深く関わる箇所、かつほぼ確実に(正確に)翻刻できたと思われる箇所に絞った。全文を載せることも可能ではあったが、そこは「分担翻刻し、ある程度まとまった時点で活字化し出版する」というこれまでの「翻字の会」の性質上、控えることにした(「備考」に夢の内容の概要を載せるにとどめた)。熊楠の文章を全て翻刻することは、あと何年いや何十年かかるか分からないが、この「データベース」を完成させることは、筆者のこれからのライフワークになるであろう。因みに、現段階のデータベースも、南方熊楠顕彰館において申請すれば、閲覧操作可能である。

データベースにおける年齢は、「数え年」である。
クリックすると、各項目のデータベースへ飛ぶことができます。

日記1
日記2へ
論考へ
書簡へ
目次へ

[1888年](#) [1889年](#) [1891年](#) [1893年](#) [1894年](#) [1895年](#) [1896年](#) [1897年](#) [1898年](#) [1899年](#) [1900年](#) [1901年](#) [1902年](#) [1903年](#) [1904年](#) [1905年](#) [1907年](#) [1908年](#) [1909年](#) [1910年](#) [1911年](#) [1912年](#) [1913年](#)

各年代へショートカットできます。

年月日 [曜日]	天気・寒暖	年齢	夢の内容についての記述	夢に関する考察・雑感	夢に類似する事例	やりあて	近親者が見た夢に関する記述	備考
1888年(明治21年)								
1888年6月16日[土]	晴	22	○					羽山蕃次郎の夢
1888年10月30日[水]	晴	22	○	○				故谷富次郎の夢
1888年12月13日[木]	陰	22	○					利光平夫の夢
1889年3月5日[火]		22	○					西村惣助の夢
1889年(明治22年)								
1889年1月11日[金]	陰	23	○					羽山蕃次郎の夢
1889年2月21日[木]	晴	23	○					覚醒時の状況明記
1889年3月5日[火] §	晴	23	○					覚醒時の状況明記
1889年3月15日[金]	晴	23	○					覚醒時の状況明記

クリックで「主な出来事」を見ることができます。

§ は別項目へリンクが張ってあることを現わします。

新しいウインドウが開きます

クリック

1889年3月5日[火] 晴

Cassells Co.へ廿五銭送る。

終日臥す。

昨朝奇夢を見る。高縄とも覚しき海辺にて巖丘より月を見るに、天くもり月血の如き色也。しばらくして気付き見れば、己れの眼開きあり、窓を通して東天を見居たり。此朝天曇り太陽雲に覆はれて其色血の如し。[二月廿一日の夢](#)と比し見るべし。

1888年(明治21年)の主な出来事

- ・ 11月16日、ミシガン州立ランシング農学校を退学。アナバーへ行く。
- ・ 11月25日、羽山繁太郎(22歳)死去(熊楠が知ったのは、1889年1月7日)。

クリックすると1889年2月21日の日記が開きます

1904年(明治37年)						
1904年1月3日[日]	晴、大風 寒	38	○	○		
1904年2月17日[水]	半晴、日没後夕映	38				○
1904年2月21日[日]	雨	38	○			
1904年2月28日[日]	半晴、夜雨、雷鳴	38		○		
1904年3月9日[水] §	朝晴、午後陰	38				○
	朝晴、午後雨 蛙連					
1904年3月10日[木] §	声して鳴はじむ	38				○
1904年3月11日[金]	雨、夕晴	38	○	○		
1904年3月21日[月] §	快 寒風	38				○
1904年3月28日[月] §	雨	38	○	○	○	

扱此ナギランは小生近来夢の告により発見多し。…〔省略〕…然るに今年本月九日又夢に丸石山（小生の宿前の禿山）に行ばナギラン有るべしと夢み、これ迄勝浦辺で随分探しこりたから止んと思ひしが、一寸行き見るに果して五株あり。次に二十一日又異所にて一株とる。…〔省略〕…それより二十三日朝なほ始めと同一の所へ行けと夢み、もはや取尽してなきに極たことと思ひながら行くに、又絶大のもの二十株とる。（太字—唐澤）

[1904年3月31日付小畔四郎宛書簡]

クリック

1904年3月9日[水] 朝晴、午後陰

朝今西氏ハガキ一受、ノーツ・エンド・キリス正月二十三日分着、予の答 Red Rag to a Bull ; Vicissitudes of Language 出。午後多屋秀、常楠状各一出す。秀吉へハガキ一出す。それより河側歩しチアンの滝に遊ぶ。ナギラン五株（一に実青きもの二顆あり）（此滝に此蘭あるべしと昨年より何の扱なきに思居しに今日ふと見当る。）エダウチ本宮シダとる。川の南岸にてミツマタ満開せるを取る。ナタネ満開せり。又アセボ如くにして花茎赤からぬものとする。

[該当する書簡（土宜法龍宛書簡）へ](#)

[該当する書簡（小畔四郎宛書簡）へ](#)

[該当する書簡（矢吹義夫宛書簡）へ](#)

[該当する論考（「千里眼」）へ](#)

クリックで該当する書簡等の記述(抜粋)を見ることができます。

「論考」画面

●印は、熊楠自身が見た夢以外の夢
(書物からの引用など)を示します。

論考

日記1へ

日記2へ

書簡へ

目次へ

夢に言及	夢に類似した事例に言及	やりあてに言及	全集巻数	雑誌・新聞名	備考
●			10巻 p134	N&Q 10s. i.	…she appeared in her husband's dream…

しかるに予那智にありて、一朝早く起き静座しいたるに、亡父の形ありありと現じ、言語を発せず、何となく予に宿前数町の地にナギランありと知らず。予はあまり久しく独居する時は、かかる迷想を生ずるものと思ひて棄て置きしに、翌朝も、翌々朝も、続けて十余回同じことあり。件〔くだん〕の地は宿に近けれども、予がその時までかつて近づきしこともなかりしなり。さて縁戚の家の手代来たりしゆえ、このことを話し、共に往〔ゆ〕いて右の地を探るに、ナギラン一株を得たり。その日いかに探すも一株しかなかりしに、翌日予一人行きて十七株を得たり。その後追い追ひ探すに、その近傍にこれこれ四十株ばかりありしも、みな取らず、二十余本を取り、田辺と和歌山に送り栽〔う〕えたるに、田辺のものは追ひ追ひ減りながら今もあり。夏に及び開花するを腊葉〔さくよう〕にし、去年牧野氏に贈れり。その時持ち行きし友人へ牧野氏の談〔はなし〕には、土佐にもありとのことなり。ただし培養品か天然産かは知らず。(太字―唐澤)

[1911年6月10日～18日『和歌山新報』「千里眼」]

[該当する日記へ](#)

[該当する書簡\(土宜法龍宛書簡\)へ](#)

[該当する書簡\(小畔四郎宛書簡\)へ](#)

[該当する書簡\(矢吹義夫宛書簡\)へ](#)

該当・関連項目を見ることができます。

クリックで、論考の抜粋を見ることができます。

[ナギラン](#) / [ペス・カブラエ](#) / [ピトフォラ](#) / [ステファノスフェラの発見](#)

書簡

年齢	宛先	夢に言及	夢に類似した事例に言及	やりとり
62	上松翁	○		
62	平沼大三郎		○	
62	山田栄太郎		○	
62	山田栄太郎			
62	上松翁			
63	白井光太郎		○	
64	岩田準一	○	○	○

マイヤルス、マヤース

(マイヤーズ Frederick William Henry Myers 1843~1901)

1843年、英国カンバーランド州(現・カンブリア州)に生まれる。ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学ぶ。若いマイヤーズは、キリスト教やヘレニズムに没頭した。彼は英国国教会の聖職者の息子であった。そのことを考えるとこの没頭はある意味必然であったと言えるかもしれない。…(中略)…彼が創案した「超常 supernormal」や「テレパシー」などの用語からも分かるように、後の心理学者だけでなく多くの一般人にも多大な影響を与えたことは間違いない。(ジャネット・オッペンハイム著・和田芳久訳・田辺澄江編集、1992、『英国心霊主義の抬頭』、p.166、工作舎)…(以下略)

文章中の緑文字をクリックすると、その詳細な注釈を見ることができます。

[羽山第4男の死の予知／横顔のみ見えて黙しおる](#)

[\(故羽山兄弟が\)いろいろのことを暗示…珍物を発見す](#)

[『Human personality』に言及／羽山4男の死の予知](#)

外国にも生物学をするものにかかる例しばしばあることは、[マヤーズの変態心理書](#)などに見えおれば、小生は別段怪しくも思わず。これを疑う人々にあうごとに、その人々の読書のみしてみずからその境に入らざるを憐笑するのみ。(弄石で名高かりし木内重暁の『雲根志』を見るに、夢に大津の高観音とおぼしき辺に到りて、一骨董店に葡萄石をつり下げたるを見、さて試みにそこに行きみしに、果たしてみずばらしき小店に夢の通りの石をつり下げありしゆえ、買い得たりなどいうことあり。これを妄誕とせる人は、その人木内氏ほどそのことに熱心ならざりしか、または脳作用が異[かわ]りおるによる、と小生は思う。)(太字—唐澤)

[1931年8月20日岩田準一宛書簡]

クリックで、書簡の抜粋を見ることができます。